

大和物語・生田川伝説の後日譚について

佐藤, 恵美子
九州大学学生

<https://doi.org/10.15017/16270>

出版情報 : 文献探究. 7, pp.11-17, 1980-12-15. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

大和物語・生田川伝説の後日譚について

佐藤 恵美子

大和物語の後半部分には、その前半部分の、宇多法皇をめぐって法皇を取り巻く人々に関する歌とエピソードを主とする世界から、題材を時代を溯つて古いとまに求めた話と展開していく世界へとの変化が見られ、そこにいくつかの伝説が収められている。生田川伝説や蘆刈伝説、立田山伝説、猿沢の池の采女入水の伝説、安積山の山の井伝説、娘捨山伝説などの伝説がそうである。このなかで、生田川伝説は、一四七段にある。一四七段は三つの部分から構成されており、その第一部分が一般に言うところの生田川伝説、第二部分は生田川伝説とともに描かれた絵と題材にして温子皇后のサロンで詠まれた歌を記し、第三部分で生田川伝説に後から加えられた後日譚を書き記している。一四七段の一段全体としての大きなまとまりは、ひとつの生田川伝説という伝説を共通項として持ち、話題が展開されていく点にある。しかし、三つの部分がそれぞれ持つ生田川伝説という要素は、読んでいて微妙に違うところ、三つの類つゝ、表情を見せているような感じを受ける。それは、古い伝説が時を経て広く流布していくなかで様々な表情をもつようになっていったにめであると思われるが、そのニュアンスの違いのある三つが、伝説・歌・後日譚と構成されているところに、一四七段のひとつのまとまりがあると思う。ここでは、三つの部分のうちの第三の部分に

あたる、後日譚を中心とする部分から問題点を取り上げて述べていきたいと思う。

一四七段の第三の部分のはじめ、後日譚にはいる前に、次のような文章がある。

さてこのおとこは くれにけのよなかまときりて かりまぬ
はかま えほうし おひととられて ゆみ やなくひ いらな
といれてそうつみける いまひとりば しろかなるおやにやあ
りけむ さもせてそありける かのつかのなまはととめつかと
そいひける

この文章を簡単に現代語に訳してみると、「ところでこのおとこについて言うと、くれにけの節と節との間が長いものを切つて、狩衣・はかま・烏帽子・おひとを入れ、ろ・やなぐひ・木刀を入れた埋めたのであった。もうひとりのおとこの方は、気の回らない親であるのであろうか、そういうこともしないで埋めたのであった。この塚の名を称してまめ塚といつた」となる。本文そのものが、平易で、訳すまでもないような文章であるが、そのなかで「ヤナグヒ」という部分の「く」という部分が、何となくわかりにくい。この部分は、文法上、「うつみける」にかかっていると思われ、それが、そうすると、異竹の節と節との間が長く伸びたのを切つて、そ

れからどのようにして理めなのであろうか。この点が、本文には何も記されていない、はっきりしない。

この部分に関して、これまでの大和物語の注釈書や通釈においては、次のような解釈がほどこされている。

吳竹の節の長くのびのびのと切つて、竹垣を作り塚を圍つたのである。

(大和物語評釈)

吳竹の節の長いのを切つて塚のまわりに垣を作り、

(小学館 日本古典文学全集)

以上の二つは、その本文として、「くぬけのよなかまきとまりて」とするものとして、その本文として、「くぬけのよなかまきとまりて」の部分にさらに「かざりて」といふことばが加わつた、「くぬけのよなかまきとまりて、かざりて」と本文とし、解釈をほどこしてある。以下がそれである。

袖中抄には、「くぬけのよなかまきとまりて」とあり。或云、墓を築く所に、竹垣などせしをいふにや。

(大和物語塵静抄)

竹のながまきとまりて、つかのめぐりに、かきなどかこひしにや。

(大和物語抄)

抄云、「よなかまきとまりてかざりて」は、竹のながまきとまりて、つかのめぐりに、かきなどかこひしにや。

(大和物語錦織抄)

これらの注釈書や通釈を見ると、「くぬけのよなかまきとまりて」

の部分に関しては、すべて、吳竹の節と節との間と長く伸びたのと切つて、それで男の塚のまわりを圍つたのであるという解釈で一致している。

そこで、まず、従来の通釈や注釈書に共通してなされている、「くぬけのよなかまきとまりて」の意味のとり方、即ち、吳竹で塚の周囲を垣めぐらしたということについて、考えてみたいと思ふ。

問題とする箇所本文について、先に掲げた注釈書のあいだで、少し違いのあることが目につく。「かざりて」という語句が加わっているか否かの違いである。大和物語評釈及び日本古典文学全集では、

くぬけのよなかまきとまりて かりきぬ……

との本文であり、大和物語抄・大和物語塵静抄では、

くぬけのよふかきとまりて かりきぬ……

となっている。枝本大和物語でこの箇所の本文の異同について見てみると、「よなかまき」↓「夜ふかき」或いは「よふかき」の異なりが記されているのみで、「かざりて」に関しては、

くぬけのよなかまきとまりて かりきぬ……

と続いていき、「まりて」と「かりきぬ」の間に「かざりて」がはいる本文のあることについての記事は見られない。それで、この「かざりて」との語句を含む本文がどういふものであるのかは、よくわからない。が、ここでは、一応、「かざりて」の語句を含まない場合と含む場合の二つがあるとして進めていくことにする。

はじめに、「かざりて」の語句を含まない場合、すなわら、

くれにけのよなかまをまりて かりきぬ……

となる本文について考えてみる。この場合、原文そのままでいくと「呉竹の節と節との間が長く伸びたのを切つて」となる。これから更に「塚の周囲をかまめぐらし」という意味が加わってくるのは何故だろうか。

呉竹というのは、ほらくとも言われる竹のことで、葉の細かい、節の多い竹である。この呉竹について、和名類聚抄には次のように記されている。

符竹 文字集略云、昔、音甘、漢語抄云、呉竹也、和語云、交種名ニ号、按呉竹下也号恐衍、太計、○下総本有揚氏ニ号和語云、作和名ニ号、計見後撰摩訶清正哥、以笠而下節茂葉者也、○下総本下滋、刻板本同、似是

ここに見える「後撰摩訶清正哥」というのは、東宮の御前にくれ竹うゑませにまひけるに

君がにめ移してうゑる呉竹にらよも籠れる心地こそすれ
清正

(『後撰集』卷二十 一三八三番)

の歌のことである。呉竹や竹が和歌に用いられる場合、竹の節(よ)にせ、あるいは代と掛けて使われることが多く、「竹のよなかま」の語句のときは、特にそうである。しかし、いま問題にしている一四七段の場合、津の国にすむ女、菟原壮士、血沼壮士の三人が七くな、後の塚のことを語っているところにあらわれているのであるから、一般に和歌に用いられる際の「よなかま」とは、たたくけ離れているのはもちろんである。

くれにけのよなかまをまりて

だけで、「塚の周囲をかまめぐらし」との意味とまで読みとるのは、この語句が示されるだけで、対象となる読者一般に、どのような状態であるのか、そのありさまが説明なしに想起されるものである必要があるのではないだろうか。

それでは、「かきりて」の語句が加えられて、

くれにけのよなかまをまりて かきりて かりきぬ……

の場合はどうだろうか。この場合、「かきりて」ということは、あるため、呉竹の節と節との間が長く伸びたのを切つて、それであまりとしてとなり、「塚の周囲をかまめぐらし」との意味も、素直に読みとることができるとは思われない。

くれにけのよなかまをまりて かりきぬ……

の本文の場合も、たとえば、「かきりて」の語句を含む場合を参考とするならば、塚の周囲をかまめぐらすという意味をとることと可能であると思う。しかし、「かきりて」という語句があつて、そのとき、塚のまわりを竹垣で囲うということが読みとれるとしても、もう一度、本文に立ち返ってみると、それほどこれにおいてもくれにけをまりて (かきりて) かりきぬ……

ではなく、

くれにけのよなかまをまりて (かきりて) かりきぬ……

となっている。これをとつても、「よなかま」ということばがあるのである。塚のまわりを竹垣で囲うことであるならば、何故、その竹が、「よなかま」でなくてはならないのだろうか。

くれにけをまりて かまりてしだけ十分はその意味を伝え得るし、
「よなかま」ということをここで示さなければならぬ必然性はど
こにもないと思われる。かえて、この「よなかま」とのことばが
あるために、竹で垣を作つて圍うとする場合、この部分の意味がす
つかりしないとということも言えるのではないかと思ふ。

「塚のまわりと竹垣で圍う」という事象について、大和物語の時
代よりもず、と後の時代になるが、江戸時代初期の井原西鶴の作品
である『好色二代男』(天和二年・西暦一六八二年刊)のなかに、
次のような部分が見られる。

……人家まよなる薄原に、かがり火の影ほのかに、卒都婆の教と
見しは、いかなる人か世をさり、惜しまるる身もありぬべし。
竹立ててらひさき右塔なほあはれなり。

(日本古典文学全集井原西鶴集より)

このなかの、「竹立ててらひさき右塔なほあはれなり」の部分の現
代語訳には、「竹の圍いをしてしほまなき供の右塔も、ひとしお哀れ深
い。」とあり、この章のさし絵にも、そのありさまが描かれている。
ここにでてきている竹の圍いは、墓が動物に(例えば、犬など)荒
らさるることがないようにするために、作らぬものである。「く
れにけのよなかまをまりて」において、それと「塚のまわりを竹垣
で圍う」との意味はとり、時代は江戸時代になるけれども、「好色
一代男」に出てくる事象と似てありさまであることが、てま
ないことばはないかも知れない。が、やはり、前に述べたように、「
よなかま」という語句のあることが、毅然としない点として残る

のではないだろうか。

以上のように、こゝまでの通釈や注釈書に一致してなされていく、
「くれにけのよなかまをまりて」の、吳竹で塚の周圍を垣めぐらし
たという意味のとり方について考えてみると、特に「よなかま」と
とある部分に関して疑問が生ずるのである。即ち、それは、この「
よなかま」との箇所に対して、納得のいく説明を見出すことがで
きるならば、「くれにけのよなかまをまりて」についても、その意
味するところと解明できるのではないかとということを示していると
思ふ。

このことから、「竹」について調べてみると、『古事類苑』の禮
式部三十二、葬禮四のなかに次のような記事が記されていく。

〔花徑樵話^{十六}〕竹杖拄瘞上

吾奥仙臺封内、及び伊達信天ノ諸縣ヲ始メ所々ニテ、新葬
ノ墓上ニ竹ヲ立ツ、コハ埋葬ノ刻、先官上ニ立テ、後上ヲ履フ
ナリ、然レドモ何ノ為ニスルトイフコトヲ知ル者ナシ、諸國又
々然リ、楓軒偶記卷三ニ云、藩制^ア。水三日ヲ過テ葬ル、古禮ニ
比スレバ甚ダ速ナリト云ヘドモ、世ノ朝ニ死テ夕ニ葬ルモノニ
比スル時ハ頗緩ナリ、凡ソ人死テ三日ノ間ハ、蘇生スベキ理^ア
アリ、故ニ三日ノ間ハ葬ルベカラズト義公^カ。仰アリシト云、
略^中。故ニ三日ヲ過テ葬ル事ナリ、小鷄村如意輪寺ノ寺僧會^ニ語
リシハ、人死テ速ニ葬ル、萬一土中ニ再生スルアラシニハ、可
哀ノ甚シキ事ナリ、故ニ空官シテ上ニ節堂ノ竹ヲ立テ、埋メ、
寺僧ハ夫ヨリ三日ノ間墓前ニ護經シ、節又キノ竹ニ耳ヲ當テ

若シ生息スルマ否ヲ聞フベシト師ノ僧ヨリ傳ヘタリ、父母ノ墓ヲ拜セルモ同意ナリ、然ルニ今ハ竹ヲ立ルト雖、節ヲマカズ、何故ニ立ルト云ヲ知ル人ナシ、可悲事ナリト云ヘリ、トアルニテ其墓生ヲ知ル為ノ物アルコトヲ見ルベキナリ、何トゾ此風俗ヲ再興シ、且ツ水戸藩ノ制ニ倣テ、三日ノ緩アリノキモノナリ、^{○中}偶記ニ又云、予が所管ノ民、葬埋ノ禮ニ薄ク、只念佛供養僧ノミヲ以テ死者ノ追慕トス、墓地甚ガ狭クシテ、人ノ墳ヲ校テ葬ルモノアリ、骸骨累累トシテ、一次幾人ヲ葬ルト云ヲ知ラザルニ至ル、予甚ガ是ヲ悲ミ、數年前、新ニ墓地ヲ授ケ、如此ノ風俗、牛馬ノ糞ヲ捨ルト齊シキ事有マジキ旨ヲ教ユ、近時見ルニ、予が巡行スルトキ、路傍ニ墳墓アルバ皆掃洒シテアリ、僻地僕俗ノ化シ易キ事如此、若シ善人アリテ是ヲ教ヘバ、一變シテ道ニ至ルト云モ難カルマジキニヤト云コトモアリ、實ニ風俗ヲ移易スハ、君子ノ難ズル所ナリ、小宮山氏が功、豈少クト云フベケンヤ、

かなり長い引用になつてしまつて、にげれども、この記事のなかで、まず目を引くのが、「吾奥州佐倉郡内、及び伊達信夫ノ諸縣ヲ始メ所々ニテ、新葬ノ墓上ニ竹ヲ立ツ」という畠頭の部分である。「墓上ニ竹ヲ立ツ」と、墓と竹との組み合わせが、あらわれている。次に、「楓野偶記卷三ニ云」として、何故、墓の上に竹を立てるのであるのかという点について述べられている。そして、小鷗村如意輪寺の寺僧がその師の僧より伝えらるゝに、こととして、人が七くなつて後あまりにはやく葬つて、方が一にも二の中です返ることがあると

し、それは非常に可哀なりなことであり、

故ニ空官シテ上ニ節空ノ竹ヲ立テ、埋メ、寺僧ハ夫ヨリ三日ノ間墓前ニ讀經シ、節メキノ竹ニ耳ヲ當テ、若シ生息スルマ否ヲ聞フベシト

のことと語つてと記してゐる。ここに注目されるのは、「節空ノ竹ヲ立テ、埋メ」との記事である。節又竹の竹と墓の上に立てるといふのである。同じ「竹ヲ立ツ」といふ表現を使つてゐるけれども、井原西鶴の「好色一代男」のなかにあらわれる「竹立て」とはまったく異なつてありさまを示していることは前後の文章から明らかである。墓の上に竹を立て、しかも、その竹はふしを抜いて立てるといふ。もし、このことと、問題としてゐる大和物語の一四七段のなかの語り、

くればけのよなかまをまりて

にも応用することが出来るならば、これは相當の妥当性を持つものになるとは、考へておかないであらうか。

第一に、双方ともに、埋葬に際してのことを書いてゐるのである。

第二に、使用されるものとしての「竹」の存在での共通が見られる。大和物語では、「くればけ」となつてゐるが、異竹といふのが一般によく植ゑられていた、よく見られる植物であつたことからして、「くればけ」とあつても、そのことにより、違ひが生じるといふことはいふと思われる。

第三に、節についてのことである。第一、第二の点についてまでは、特に、「古事類苑」の「花徑舊話」の記事によらなくても、尤

に述べたことのなかでも共通する場合は見受けられぬのである。そこで疑問点として残ったのが、「よなかま」ということばである。ところが、この『古事類苑』のなかにみられる節についての記事とあてはめてみると、「よなかま」となっていることが、理解できるように思われる。『古事類苑』の「花徑樵語」の中に引かれている「楓軒偶記」によると、節めきの竹となつてゐる。竹の節と抜いて立てるとするならば、それは、節と節との間が長く伸びたもの、すなわち、「よなかま」竹を用いるのではないかと考えらる。

このように考えを進めていくと、

くれにけのよなかまをまりて

という部分は、呉竹の節と節との間が長く伸びたのを切つて、その節を抜いて、塚の上になく出るようにして立てて、との意に解されると思ふ。そして、この考え方をとると、大和物語抄、大和物語、静抄に見られる、

くれにけのよなかまをまりて かまりて

という本文の、「かまりて」のことは、前とは及村氏、かえつてこの部分の意味を混乱させる余計なものとなつてくるのである。

しかしながら、「くれにけのよなかまをまりて」に、節めきの竹を立てたとの考えをあてることについて、まったく問題点がないというわけではない。ここで用いている、節めきの竹とたてるという事象は、『古事類苑』のなかにある「花徑樵語」の記事のなかで、「楓軒偶記」を引つて述べている部分に出てくるものである。「花徑

樵語」については、それを捜し出すことができなかった。のだから、「楓軒偶記」は、日本隨筆大成第三期年巻に収録されてゐる。それをみると、まさか、「花徑樵語」の中からは「楓軒偶記」を三三として引用されている部分は、巻三ではなく巻四のなかに「○三日子過于華ル」として、同じ文章が記されてゐる。そして、『楓軒偶記』の序の最後に「文化四年丁卯 六月十二日」との記述がなされてゐる。これにより、「楓軒偶記」のなかに記されてゐる事象は、江戸時代後期には存在してゐたことがわかる。かゝる江戸時代と大和物語の時代とは、大まかな時間的隔たりがある。このような民俗的習慣が長い期間にわたつて、ほとんど変化しなうが、続くことあるとして、大和物語の頃までさかのぼつて存在したと考へてもよいものかどうかわからない。

節めきの竹を立てるといふ事象に関して、民俗学の方面で何かなにかと思ひ、柳田國男全集にあたり、みたが、そこには、それらしいものを何も見出すことができなかった。しかし、『日本を知る小事典』冠婚葬祭（現代教養文庫）という本のなかに、

つぎに、埋葬した場所にはエまんじゅうをおおひやうに竹と教本組みかけたり、折り曲げたりすることがある。その竹には鎌をぶらまげるとか、鎌を立てかけることもあるが、これらと意味が、たものと考へらる。とくに、エまんじゅうの上に青い竹と一本か二本深くさしこんで、これをイキツキアツとカイキツキアツなどとよんでいる。実際に竹の節をぬいておく地方

もあり、死霊が通うため、死者が墓の中で蘇生したときに息と
するにめなど説明しているが、遺体の埋葬が死後に早く行わ
れるようになって、なお肉体と靈魂の分離が不完全に終わること
とおそれたにめかもし知れない。

との文章があり、こゝによつても、節めきの竹を立てるといふこと
が美談にあつたことを知ることが出来る。更にこの文章のなかに出
てくる「イキツキダケ」「イキツキアナ」といふことは、『綜合
日本民俗語彙』のなかにも

イキツキアナ 葬 息つき竹。宮城縣社康半島の鮎川町では、
上を細く削つて輪にした六尺ぐらゐの節を抜いた竹を埋葬した
上に立てる。(島二)

イキツキダケ 葬 息つき竹。茨城縣新治郡では、青竹の長さ
六尺以上のものを二本の節を抜き、多くは手傳人の一人が持つて
葬列に加わり、埋葬した土饅頭の中央に立てる(民俗學三ノ六
)。靈の通路とするために必要だったのであろう。

とあり、他にも、墓の上に立てる節を抜いた入餘の竹をあらかずも
のとして「イキズエ」の語もみられる。また、この「イキツキダケ
」の項に示すよりのように、『民俗學』の第三卷には資料・報告
として中川さぶ子氏の「茨城縣新治郡上天津村の葬式」があり、そ
の葬式當日のありさまとして、

葬列は先頭 秋明(近所の手傳ひの男かもつ) 六地藏をも
つた人(同上) ……中略……墓標(手傳ひの男) 息つき竹(同
上)。節めき長さ一間以上の青竹二本) 花にて(節めきの青

竹四寸ぐらゐのもの二本。手傳ひの人もつ)……以下略
サテ、埋葬するときには、

次に近親が各々一つまみの土をもつて埋葬する形のみとする。
墓はお節子(？)息めき竹二本と中央にして土饅頭をつくる。

とあつて、節めきの竹を立てるといふことのあることが記されてい
る。

以上、大和物語一四七段のなかの、後日譚を中心とする部分の冒
頭、

さてこの竹とこは くれにけのよなかまときりて……

という箇所とどのような意味にとつたらよいかについて述べてま
のであるが、私の結論としては、時代的に問題がなければ、この箇
所と「息竹の節と節との間が長く伸びたのを切つて、その節をぬい
て、塚に立てて」という意味にとりたい。このよきな意味にとるこ
とができるならば、「くれにけのよなかまときりて」という表現が、
埋葬のさまを語っている部分のはじめとして、以下の文ともよりつ
ながりのよいものになるのではないかと思うのである。

——九州大学学生——